

ニッポン ドクター和の 臨終図巻



「ハマツチ擦る つかのま海に霧
ふかし 身捨つるほどの祖国はあ
りや」。寺山修司の有名なこの短
歌は、1957年に出た歌集に収
録されています。「身捨つるほど
の祖国」とは、生まれた故郷とい
う意味ではなく、戦後日本の姿。
自由という名の個人主義、拝金主
義が横行する中で、命を捧げるほ
どの「何か」がこの国にあるのだ
ろうか? と寺山は問いかけま
す。

僕はその答えを出せぬまま、た
だ目の前の患者を「ひとりも、死
なせへん」という想いで、コロナ
禍を疾走しました。しかしこの人
は本当に、命を捧げて逝ってしま
った。大切な医師仲間であった長
純一氏が6月28日に宮城県石巻市
内の自宅で死去されました。享年
56。死因は膵臓がん。

長医師は東京出身、信州大学医
学部卒業。長野の佐久総合病院に

262 医師 長純一



長尾和宏 (ながお・か
ずひろ) 医学博士。東
京医大卒業後、大阪大
第二内科入局。1995年、兵
庫県尼崎市で長尾クリ
ニックを開業。外来診療か
ら在宅医療まで「人を診
る」総合診療を目指す。
この連載が『平成臨終図
巻』として単行本化さ
れ、好評発売中。関西国
際大学客員教授。

は今年4月下旬。悪性腫瘍かもと
悪い予感を抱えながら、しかし多
忙を極めていた彼が病院を受診し
たのは1カ月後。6月2日に、末
期の膵臓がんが多発肝臓転移、腹
膜播種によりほぼ腸閉塞の状態で
あると診断されます。そして6月
21日、YouTubeで自らの闘
病と感謝の想いをしっかりと語ら
れました。

のチームが、24時間体制で訪問診
療をしにきてくださり、そして何
よりも看護・介護、ケアの領域の
人達がすぐ動いてくれ、私の生活
を支えてくれ、生活と命を支えて
くれています。(中略) おそらく
私は今、日本一恵まれた医療を受
けている患者だと考えています。
このような状態でも家にいられる
だけではなく、自分の訴えたいこ
とを作ってもらえたことも含め
て、大変幸せな患者であり、人間
だと思っています。――

最期まで「私」より「公」を優
先し、地域包括ケアによって被災
地を復興させることに邁進した長
医師は、生まれ故郷に帰ることな
く、自分が構築した地域医療の中
で、仲間に見守られて人生の幕を
閉じました。

正直、彼の死をまだ受け入れら
れません。なぜなら、東北に行く
かどうか迷っていた彼の背中を押
したのは、僕だからです。気持ち
の整理がつかぬまま原稿を書いて
います。彼の十八番は「北国の
春」でした。その魂は、ずっと祖
国・石巻とともに。

被災地復興に捧げた命